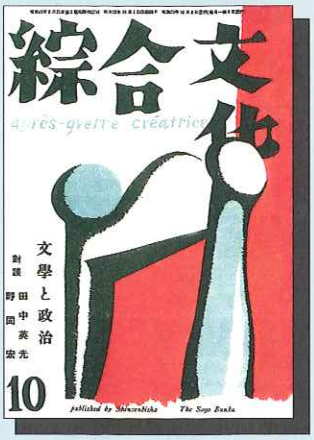
そこは世代間の交流と論争の場であり、
絵画を含めた前衛芸術運動の拠点でもあった。
雑誌『近代文学』や『新日本文学』と並ぶ、
「戦後文学」もう一つの起点！

戦後文化運動雑誌叢書⑧

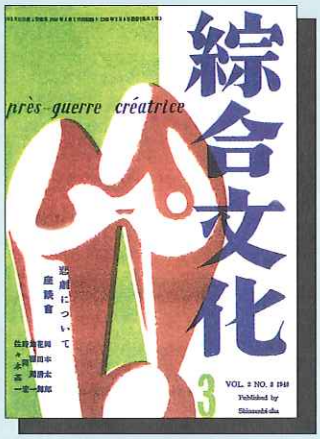
綜合文化協会機関誌／真善美社発行

綜合文化

全3巻 別冊1 1947年7月~1949年1月 復刻版



1948年10月号



1948年3月号

1947年3月号

体裁 A5判・上製・総1,318頁

解説 鳥羽耕史

推薦 池田浩士・高良留美子
鶴見俊輔・成田龍一

定価 本体揃価格 48,000円＋税

刊行 2009年10月一括刊行

不二出版

復刻にあたって

文芸雑誌『綜合文化』は、『近代文学』や『新日本文学』と並ぶ、いわゆる「戦後文学」の起点の一つであり、敗戦後に解放された文学・思想空間における世代間の交流と論争の場であり、絵画も含めた前衛芸術運動の拠点でもあった。綜合文化協会の月刊機関誌である本誌は、一九四七年七月から一九四九年一月まで総一七冊が刊行された。発行所は真善美社。

花田清輝がブレーンとなり、関根弘らが編集したこの雑誌は、戦時下の花田と中野秀人らの〈文化再出発の会〉と、加藤周一、中村真一郎、福永武彦らの〈マチネ・ポエティーク〉のグループとの合流によってはじめられ、『近代文学』派の作家や安部公房など若き戦後派の旗手たちが参加して、野心的な誌面を作った。

ここに収められたのは、後年に名を残した創作や評論ばかりではない。

第一号の巻頭は、加藤周一の「世界　亜米利加に学び理性をもとめるための方法叙説」。題名が示すとおり、この世界的な視野をもつエッセイは号を追い、書き手を変えてドイツ、中国、スペイン、フランス、イギリス、イタリアとリレーされ、世界認識の方法を模索した。

また、「戦（アプレ・ゲール）後文学の方法を索めて」・「アヴァンギャルドの精神」等々と題された五～八名による座談や、野間と田中英光の「文学と政治」・埴谷雄高と椎名麟三の「「死霊」と「序章」をめぐつて」などの対談には、当時はまだ若かった知の巨星たちの真剣勝負がみてとれる。読みごたえ十分、この雑誌でしか閲覧がかなわない魅力である。

本誌は短期間でその役割を終えたが、ここに集った人々は〈夜の会〉や〈世紀の会〉等に舞台を移し、相互批評と創作活動を続けていった。

本誌の復刻は、「発言」が億劫で窮屈な現在に、世界を語ること、周囲の友人たちと議論を重ねること、一人の人間と真剣に向き合うことの大切さをもう一度教えてくれるに違いない。

不二出版

主要執筆者一覧

青山光二
赤松俊子（丸木俊）
安部公房
荒　正人
井出則雄
伊藤　整
今村太平
岩上順一
上野省策
内田　巌
大井広介
大西巨人
岡本　潤
岡本太郎
小田仁二郎
小田切秀雄
小野十三郎
加藤周一
上林澄雄
木原　稔
窪田啓作
斎藤信治
佐々木基一
椎名麟三
島尾敏雄
白井健三郎
杉浦明平
関根　弘
高橋錦吉
田木　繁
竹内　好
竹田敏行
田中英光
田村隆一
長　光太
鶴見俊輔
永井　潔
中田耕治
中野秀人
中野泰雄
中村真一郎
野間　宏
服部之総
花田清輝
埴谷雄高
原條あき子
日高六郎
平田次三郎
平野　謙
福田恒存
福永武彦
富士正晴
藤島宇内
星野芳郎
馬淵量司
三浦つとむ
水野明善
南　博
宮本治（いいだもも）
矢内原伊作
柳田　泉
柳田国男

内容見本

上段　第一巻　第一号の目次
下段　右＝第二巻　第二号の本文より
　　左＝第一巻　第一号の本文より

綜合文化

—第一號—

亞米利加に學び理性を求めるための
方法敍說……加藤　周一（三）
牧歌調……關根　弘（八）
加波山……服部　之總（二）
〈7月14日〉歴史……中野　泰雄（三四）
風俗……中村眞一郎（三六）
☆一つの日本經濟……田代　正夫（一九）

詩
祝聲……野間　宏（三四）
橋について……岡本　潤（一九）

平賀源内……佐々木基一（三八）
陳靜芝（創作）……窪田　啓作（三五）

★表紙素描　永井　潔
★カット　中野秀人・高橋錦吉・高松健太郎

戰後文學の方法を索めて

職人と藝術家　野間宏の小説
アルチザンの定義　椎名麟三と梅崎春生
太宰治と坂口安吾　宮本百合子
日本文學の傳統　福永武彦の小説
エキゾチズム　「死の影の下に」
外國文學に學ぶ方法　國かう決意
獨創性の地盤

座談會
佐々木基一
花田清輝
野間宏
福田恒存
加藤周一

職人（アルチザン）と藝術家（アルチスト）

體驗（體驗談）　戦後約三年を經過して、との期間に、戦爭中に書えられてきた文學者も辯解な感覚で、戦後文學を推進するために活潑な意見の交換を圖ひたいと思ひます。では、佐々木さんからひとつ……

佐々木　戦後に特に目立つた現象として花田さんの「復興期の精神」あゝいうものだつて從來なら一種の傍流的な存在だつたけれども、それが非常な反響があつたということ、そこらに、日本文學が新しく生れかはる

世界

亞米利加に學び理性をもとめるための

方法敍說

加藤周一

良識、或は理性が萬人に等しく頒ち與へられたものだと云ふ說は、西歐の古典的人間にしか通用しない。兒童心理學は子供に理性の乏しいことを證明してゐるし、精神病理學は分裂病患者に良識の缺如を認めてゐる。子供は人間に屬せず、問題は健康人に限られるとしても、西歐的意識の原則は、人類の古今東西に普遍妥當的なものではない。デュルケーム學派は、先天的理性の飽ちゆうさへ、本來社會的なものであることを實證した。西歐の枠の外では、良識或は理性が必ずしも萬人に等しく頒ち與へられてゐないのである。從つて、我々極東の住民にとつては、「理性を正しく導くための」方法敍

「前向き」だった戦後を問いなおすために

池田浩士〈京都精華大学客員教授〉

一九四七年という年は、「戦後」日本がどういう道を歩むのか、その基本的な方向をめぐって相反する力のせめぎあいが顕在化した一年だった。三月末に教育基本法と学校教育法が公布され、五月三日には新憲法が施行された。六月一日には、さきごろ相次いで行なわれた衆参両議院の選挙でいずれも第一党となった社会党を中心とする片山内閣が発足した。七月上旬にはGHQが戦犯企業である三井物産と三菱商事の徹底解体を指令、十月下旬には「不敬罪」「姦通罪」を廃止する改正刑法が公布された。その一方で、二・一ストのマッカサーによる禁止、極東国際軍事裁判の検事キーナンの「天皇に戦争責任なし」という十月十日の発言など、いわゆる「逆コース」がすでに台頭してきている。どちらの道が大道となったのかは、周知のとおりである。

『綜合文化』は、その年の暑い夏に誕生した。だが、四九年一月まで続いたこの月刊雑誌の誌面を見て、わたしはいささか奇異の念に打たれるのだ。第二号（八月刊）には、一人の人間の戦争責任を始めて問うた文学作品である（と、わたしが考える）野間宏の「顔の中の赤い月」が掲載されている。だが、この一作はいわば「後ろ向き」の数少ない例外である。どの号からも、新しい時代への「前向き」の息吹が鮮烈に惜しみなく発散している。暗い時代が過去のものになったことを、当時はいずれもまだ若かった「戦後文学」の中心的な旗手たちが、これでもかこれでもかと謳歌しているのだ。

これが、日本文学における「戦後」だった。なぜそうなのか、なぜ「顔の中の赤い月」が例外でしかなかったのか？　つまりここで何が忘れられたのか？――いま『綜合文化』が復刻されることの大きな意味の一つは、これを徹底的に問うための手がかりを、ついに後世が手にすることにあるだろう。

「忘れられていた環」の復権

成田龍一〈日本女子大学人間社会学部教授〉

敗戦から六〇年を経たいま、戦後思想史・文化史の書き換えが、急速に進んでいる。一九五〇年代のサークル運動への注目など、そうした動きのなかの一齣であろう。

このとき、一九四〇年代後半にも、書き換えの手がかりは存在している。花田清輝が肝煎りとなった『綜合文化』は、その筆頭格である。「敗戦は一八六八年の日本の出発の誤りを明らかにした」「眼の前の廃墟こそ、われわれの過去のほんとうの姿であった」という『綜合文化』の「宣言」はなんとも意味深い。

とともに、「二〇世紀の課題」を「遂行」するのは「われわれ新世代をおいて他にないこと」も「宣言」に盛り込まれる。実際、誌面には加藤周一や中村真一郎、あるいは野間宏や関根弘、さらには星野芳郎、日高六郎らまで戦後に登場したあらたな書き手たちが顔を揃える。

『綜合文化』には、戦後思想・文化における集合と分散、連続と断絶が折り込まれている。同人には多様なグループの面々が合流しており、一種の統一戦線の様相を見せている。同時に、そのことの延長として、たとえば『近代文学』同人を座談に招きつつ、同誌とは異なった方向を探ろうとも試みる。

あるいは『綜合文化』は、三宅雪嶺の『真善美』に直接に由来するとともに、一九四九年に停刊してしまう。戦前と戦後、一九四〇年代後半と五〇年代との二重の連続と断絶を、『綜合文化』は体現しているのである。

今回の復刻によって、これまでの戦後思想史・文化史の叙述において、忘れられていた環が相貌を現わすこととなる。戦後思想史・文化史の書き換えは、『綜合文化』を介在させることにより、いっそう拍車がかかるにちがいない。

1949年1月号

1948年11月号

心に残った花田清輝の発言

高良留美子〈詩人〉

『綜合文化』という雑誌を、わたしは一九四八年六月号と七月号によって知り、すごい雑誌だと思いつづけてきた。のちに結婚する竹内泰宏の本箱にあったもので、七月号などいまは綴じ目が破れて解体寸前になっている。

当時わたしは一五歳半、とてもこのような雑誌を手にとる年齢には達していなかった。二冊の雑誌を読んだのは、『希望（えぼうし）』でかれと知り合った一九五二年以降のことだ。

やはり印象に残ったのは、誌面の大きな部分を占める座談会である。七月号では荒正人、岩上順一、花田清輝、野間宏、佐々木基一、中村真一郎、加藤周一の七人が「リアリズムをめぐって」語りあっている。前半では岩上と佐々木が、後半では荒と中村が主に発言し、野間、加藤、花田がたまに口をはさむ。

なにかがわかったというわけではない。しかし花田清輝の発言は、なぜか心に残るものがあった。「ぼくらの場合は、リアルなものをつかまえるということが問題なんだ。だからクリティシズムを印象批評でやれば愛情と憎悪とを同時に同一の対象にたいしてもとうと努める。（略）テーゼと同時にアンチ・テーゼを常に持ってきてリアルなものをつかもうと望む。（略）そうでなければ、歴史的制約から一歩も脱け出せませんよ。」「一つのボールを突詰めるということ、そうすると常に反対のボールがそれと併行して突詰められてゆく。それが同時に存在するということなんだ。だから本当にもやもやしていい。憎むなら徹底的に憎む。愛するなら徹底的に愛すればいい。」

わたしはその頃から花田清輝の読者になり、いつか『綜合文化』の全貌を知りたいと望むようになった。今度、その望みが達せられるのはうれしい。

『綜合文化』復刻に寄せて

鶴見俊輔〈哲学者〉

『綜合文化』の復刻はうれしい。このもとにある三宅雪嶺の「我観」を、おもしろく読んでいた。この人は、単純に右翼として片づけることできない厚みをもっていた。その厚みを孫たちが受けついだのが綜合文化だ。

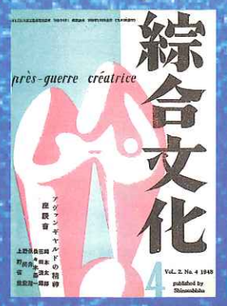
溜池に事務所があり、そこに行って編集者の関根弘に会い、彼のもっているソ連の見方に共感した。この雑誌にたのまれた時にはよろこんで書いた。「戦後小説の形」というエッセイで、あいまいということへの積極的評価を主題としている、私としては、戦後の自分の出発点にあたる。

明晰判明を旗印とする桑原武夫に、その俳句批判の反対地点に自分がいることのあかしとして進呈した。桑原さんはすぐ読んでその宮本百合子論（中央公論）にとりいれてくれた。包容力のある人と思い、そこから桑原さんとのながい線が出来た。

「綜合文化」がつぶれるときの債権者会議で小田仁二郎と同席したことも忘れがたい。私は小田の「触手」をめずらしい作品と思って注目していた。

野間宏・花田清輝と会うのはそれからずいぶんたってからのことである。私の最初の本『アメリカ哲学』は、真善美社から出ることになっていた。

1947年6月号



1948年4月号

1948年5月号

既刊書 「戦後文化運動雑誌叢書」1～7のご案内

午前

《全5巻・別冊1》
南風書房＝発行／北川晃二＝編
昭和21年～24年刊

体　裁　A5判・上製・総2,104頁
別　冊　解説・回想・総目次・索引
解　説　狩野啓子・長野秀樹・深野　治
揃定価　90,000円＋税
推　薦　大西巨人・紅野敏郎
刊　行　2004年6月刊　ISBN978-4-8350-5297-7

文化展望

《全3巻・別冊1》
三帆書房＝発行／大西巨人ほか＝編
昭和21年～23年刊

体　裁　B4判並製・B5判上製・総666頁
別　冊　解説・総目次・索引
解　説　赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
揃定価　28,000円＋税
推　薦　大西巨人・紅野敏郎
刊　行　2004年6月刊　ISBN978-4-8350-5304-2

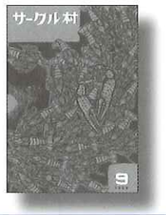
鵬・ピオネ・藝術前衛

《全2巻・別冊1》
鵬同人社ほか＝発行
岡田芳彦・出海渓也ほか＝編
昭和20年～25年刊

体　裁　菊判・上製・総886頁
別　冊　解説・総目次・索引
解　説　赤塚正幸・麻生　久・出海渓也
揃定価　35,000円＋税
推　薦　大西巨人・紅野敏郎
刊　行　2004年6月刊　ISBN978-4-8350-5309-7

サークル村

《全3巻・付録1・別冊1》
九州サークル研究会＝発行
昭和33年～36年刊



体　裁　A5判・B5判・上製・総1,946頁
別　冊　解説・回想・総目次・索引
解　説　井上洋子・坂口　博・松下博文
揃定価　65,000円＋税
推　薦　有馬　学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔
刊　行　2006年6月刊　ISBN978-4-8350-5715-6

人民戦線

《全5巻・別冊1》
人民戦線社＝発行／中西伊之助＝主宰
昭和20年～24年刊

体　裁　A5判・上製・総1,700頁
別　冊　解題・総目次・索引
解　題　勝村　誠・秦　重雄
揃定価　68,000円＋税
推　薦　高柳俊男・西田　勝
刊　行　2006年10月刊　ISBN978-4-8350-5737-8

ヂンダレ・カリオン

《全3巻・別冊1》
大阪朝鮮詩人集団機関誌
昭和28年～38年刊

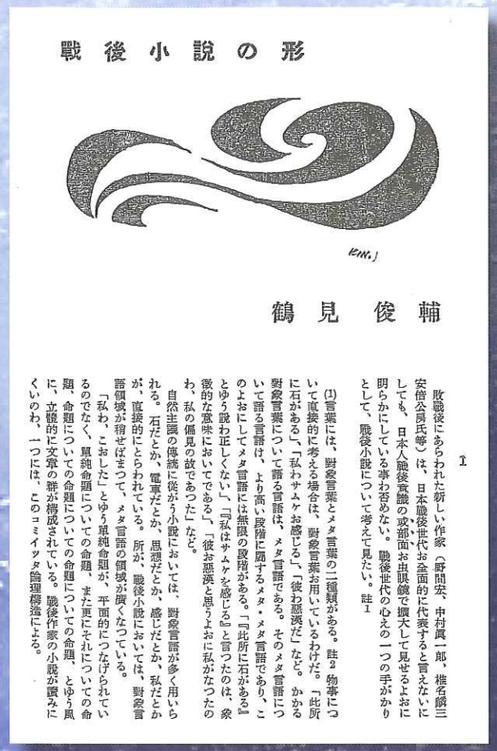
体　裁　A5判・上製・総922頁
別　冊　解説・鼎談・総目次・索引
解　説　宇野田尚哉・細見和之
揃定価　36,000円＋税
推　薦　金時鐘・梁石日・鵜飼哲・米谷匡史
刊　行　2008年11月刊　ISBN978-4-8350-6268-6

東京南部サークル雑誌集成

《全3巻・付録1・別冊1》
昭和26年～35年刊

体　裁　B5判・上製・総1,800頁
別　冊　解説・解題・回想・総目次・索引
解　説　道場親信　解題＝浜賀知彦
揃定価　68,000円＋税
推　薦　小関智弘・坪井秀人
西川祐子・ハリー・ハルトゥーニアン
刊　行　2009年7月刊　ISBN978-4-8350-5903-7

内容見本



戰後小說の形

鶴見俊輔

敗戰後にあらわれた新しい作家（野間宏、中村眞一郎、椎名麟三安倍公房氏等）は、日本戰後世代を全面的に代表すると言えないにしても、日本人戰後意識の或部面を出眼鏡で擴大して見せるよおに明らかにしている事は否めない。戰後世代の心えの一つの手がかりとして、戰後小說について考えて見たい。註1

(1)言葉には、對象言葉とメタ言葉の二種類がある。註2 物事について直接的に考える場合は、對象言葉お用いているわけだ。「此所に石がある」、「私はサムケお感じる」、「彼ゥ惡漢だ」など。かかる對象言葉について言語は、メタ言語である。そのメタ言語について語る言語は、より高い段階に位置するメタ・メタ言語であり、このよおにしてメタ言語には無限の段階がある。「『此所に石がある』とゆう調わ正しくない」、「『私はサムケを感じる』と言ったのは、象徵的な意味においてである」、「彼お惡漢と思うよおに私がなつたのわ、私の偏見の故であつた」など。

自然主義の傳統に從がう小說においては、對象言語が多く用いられる。「石だとか、電車だとか、風潤だとか、感じだとか、私だとかが、直接的にとらわれている。所が、戰後小說においては、對象言語領域が狹せばまつて、メタ言語の領域が廣くなつている。

「私わ、こおした」とゆう單純命題が、平面的につなげられているのでなく、單純命題についての命題、また更にそれについての命題、命題についての命題についての命題」とゆう風に、立體的に文章の群が構成されている。戰後作家の小說が讀みにくいのわ、一つには、このコミイツタ論理構造による。

名もなき夜のために

I

安部公房

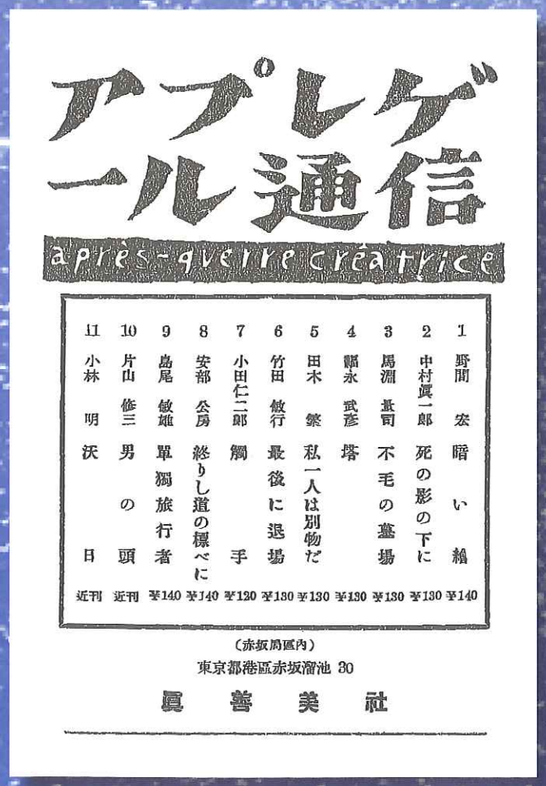
夜……。

消極的に、單に力を奪ひ去られたやうな疲勞ではなくて、疲れといふものが物質のやうに筋肉の隙間などに浸み込んで來るのが感じられる晩など、特に衾褥の飾り墮を纏のやうに思げて必要以上に胃の部分を壓縮しなければならぬやうな時、僕は眠りにつく餘間を意識出來るやうに思つた。若しそんな時、樣々な物音が內部から逆に外界の聲音に向つて鳴り渡るやうな感がすれば、それは發作が起る直前の發作なのだ。墨根をすべり落ち、網膜を揺やすり、落葉をかき集めては町角を右に左に流れて行く風の音が、ふと鳴り止んで僕の心臟のざわめきのやうに感じられ始める。と、その物質いきズムは理もなく水面に擴がる波紋のやうに拡くふるへながら僕の外殼を穿りひろげ、一切の心象を一つ一つ意味の世界から解き放つ。そして最後に宇宙全體が僕の眼球であり、その中を限なく廻り巡る毛細血管のざわめきであるやうに感じられた刹那、突然眞暗な感覺が、右足の指の先からじわじわと伸び上つて來る。眠いてその部分が眠つてゐるやうに冷く知覺を失つてしまふ。

そんな具合にして發作が始まるのだが、最後にどうしても蘇醒してしまへない部分が脳の何處か一點に殘されるらしく、僕はぐつたりと仲び切つた體の上で始まる奇怪な光景を見詰めなければならない。それはアウラのやうな狀態だつた。いや、アウラそのものであつたのかも知れない。僕はその中で恐怖のどん底に沮ひつめられる

第2巻 第12号の本文より（原本を65％縮小）

第2巻 第7号の本文より（原本を65％縮小）



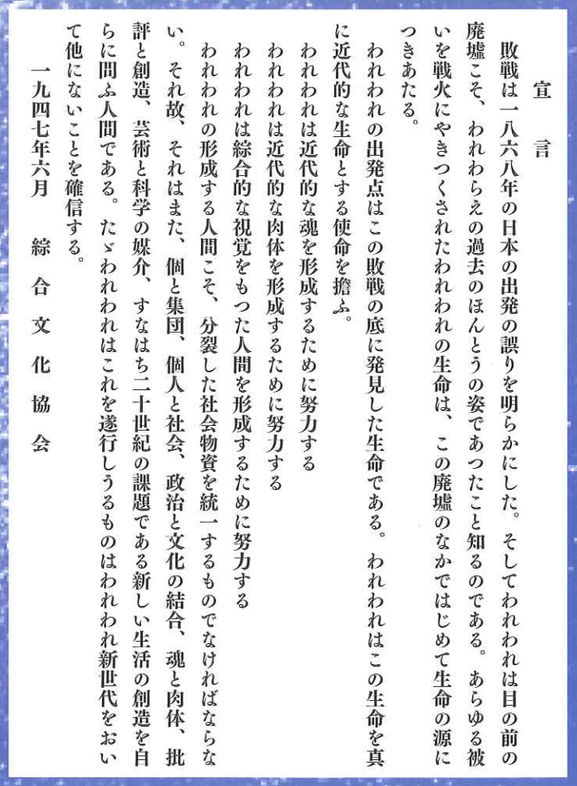
アプレゲール通信

apres-guerre creatrice

1	野間宏	暗い絵	¥140
2	中村眞一郎	死の影の下に	¥130
3	馬淵晴司	不毛の墓場	¥130
4	福永武彦	塔	¥130
5	田木繁	私一人は別物だ	¥130
6	竹田敏行	最後に退場	¥130
7	小田仁二郎	鯛手	¥120
8	安部公房	終りし道の標べに	¥140
9	島尾敏雄	單獨旅行者	¥140
10	片山修三	男の頭	近刊
11	小林明	沃日	近刊

（赤坂局區內）
東京都港區赤坂溜池 30
眞善美社

別冊の解説に収録した資料より（原本を65％縮小）



宣　言

敗戰は一八六八年の日本の出発の誤りを明らかにした。そしてわれわれは目の前の廃墟こそ、われわらえの過去のほんとうの姿であつたこと知るのである。あらゆる被いを戰火にやきつくされたわれわれの生命は、この廃墟のなかではじめて生命の源につきあたる。

われわれの出発点はこの敗戰の底に発見した生命である。われわれはこの生命を真に近代的な生命とする使命を擔ふ。

われわれは近代的な魂を形成するために努力する

われわれは近代的な肉体を形成するために努力する

われわれは綜合的な視覚をもつた人間を形成するために努力する

われわれの形成する人間こそ、分裂した社会物資を統一するものでなければならない。それ故、それはまた、個と集団、個人と社会、政治と文化の結合、魂と肉体、批評と創造、芸術と科学の媒介、すなはち二十世紀の課題である新しい生活の創造を自らに問ふ人間である。たゞわれわれはこれを遂行しうるものはわれわれ新世代をおいて他にないことを確信する。

一九四七年六月　綜合文化協会

第1巻 第1号の本文より（原本に基づき再現）

復刻版概要　戦後文化運動雑誌叢書⑧

綜合文化協会機関誌／真善美社発行

綜合文化

1947年7月～1949年1月

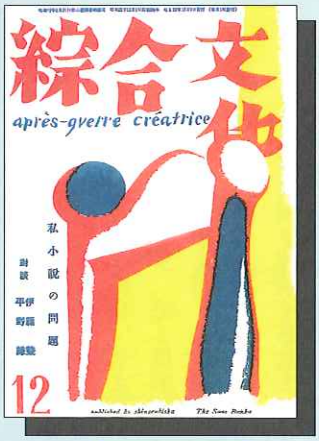
全3巻 別冊1　復刻版

1948年6月号

復刻版収録内容

第1巻▶第1巻第1号（1947年7月）～第1巻第6号（1947年12月）総376頁
第2巻▶第2巻第1号（1948年1月）～第2巻第7号（1948年 7月）総480頁
第3巻▶第2巻第8号（1948年8月）～第3巻第1号（1949年 1月）総462頁

体裁――A5判・上製・総1,318頁
別冊――解説・総目次・索引
別冊のみ分売可＝本体1,000円＋税
ISBN978-4-8350-5164-2
解説――鳥羽耕史（徳島大学総合科学部 准教授）
原本提供――帝塚山大学図書館
刊行――2009年10月一括刊行
定価――本体揃価格 48,000円＋税
ISBN978-4-8350-5160-4
推薦――池田浩士・高良留美子・鶴見俊輔・成田龍一



1948年12月号

1947年2月号

＊表示価格はすべて税別

不二出版

▶〒113-0023 ▶東京都文京区向丘 1-2-12
▶TEL 03-3812-4433 ▶FAX 03-3812-4464
▶振替 00160-2-94084

2009年10月